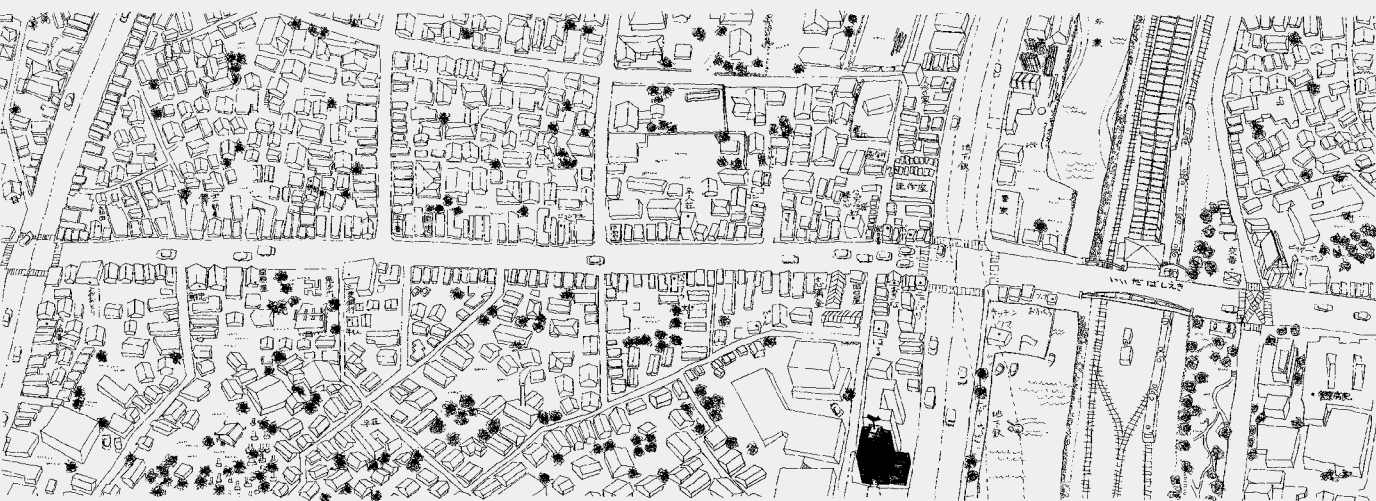


4-4. 築理会のあゆみ





築理会名簿初号(昭和46年発行)

1. 「築理会」の揺籃期

最初の「築理会名簿」がある。昭和46年(1971)4月発行、第一部6期までの名簿である。卒業生数558名、A5版、63ページのささやかなものであった。昭和41年に初めて卒業生が出て5年後、この年、東京理科大学工学部建築学科同窓会「築理会」が発足し、11月には「家の光会館」で最初の総会・懇親会が開かれている。「築理会」の名称は、お分かりのように「建築」の“築”と“理科大”の“理”を取ったもの。これには“理想を築く、理念を築く”の意味もあったようである。「築理会名簿」はこの後、昭和48年、51年、55年、56年と発行されている。この当時の築理会の活動は学内にいる有志で運営され、名簿の発行のみであった。なお、昭和55年度の記録を見ると、会費納入は560名/(1,146)名、納入率49%と記されている(会費2,000円)。この当時は全員に名簿を発送していたが、それでもこの数字は、「築理会」への関心の高さを示している。昭和56年度の名簿から第二部卒業生(第二部2期まで)も掲載し、築理会として工学部建築学科第一部、第二部が一緒になったことになる。

2. 第1回「築理会」総会・懇親会

学内の有志による活動で、不定期に名簿だけの発行の築理会でなく、しっかりした組織を持った同窓会を作ろうとする動きが学外からも出てきた。そして記念すべき第1回築理会総会・懇親会が昭和58年(1983)9月、第1期主催で芝の「東京郵便貯金会館」で開催された。会長に福島正之氏(1期)を選出、新しい会則も制定し(築理会・年会費3,000円)、各期の幹事も定め文字通りの同窓会としての築理会が発足した。この時の出席者は卒業生(会員)128名、教員6名(計134名)であった。又、会報として「築理会報」も発行(年2回)されるようになる。最初の号(S.59/2)はB5版4ページであったが、第1回総会・懇親会の記事が掲載されている(図版)。その号に森脇哲男先生の書かれた“昭和37年



築理会報昭和59年2月発行

の建築学科”の文が載せられているので少し長いがその一部を再録する。“昭和37年4月に東京理科大学に工学部建築学科が誕生した。当時は故浜田教授と私の二人で教授室も借家住まいであった。赴任当時、前からいた理学部の先生方に『今度の工学部の入学生はひどいものだ、入学試験での態度もひどかった。しめてかからないと、先生もひどい目にあいますよ。』とおどされたものだった。しかし、私はパイオニアクラスとしてはそのくらいの元気はほしいものだと思っていたので、別に気にしなかった。……”と書かれていた。

第2回総会・懇親会は昭和59年(1984)9月、飯田橋会館で行われた。主催は順次次年度の卒業生と会則の内規でも決めていたので、この時は2期が主催期であった。又、記念講演会を理科大1号館17階記念講堂で芦原義信先生にお願いして当日開催している。第3回総会・懇親会は予定通り昭和60年7月に開催し、会報もこの年までは年2回が守られていた。しかし、昭和61年になると会報の発行は1回となり、総会・懇親会も毎年開く必要はないのではないかとの意見も出て、この年は総会・懇親会は開かれなかった。

次の昭和62年に第4回総会・懇親会は理窓会館で開かれているが、会報・名簿はこの年は発行されなかった。昭和63年には2年ぶりで築理会報が発行されている。この会報の一面の記事に“変わる理科大学周辺”で“佳作座も4月で閉館となった”とある。外堀通りに面し、安くてよい映画を上映していた“佳作座”を知っているのは第一部25期・2部11期(昭和62年入学、平成2年卒)までぐらいであろう。平成3年は久ぶりで会報発行され、名簿も発行。なお、この年には久我新一先生が理科大を退職される時、100万円のご寄付を築理会にいただいた。厳しい財政事情の時、ありがたい申し出であった。平成4年は総会・懇親会の開催、会報、名簿も発行している。平成5年は活動無し、この年の会費等の収入は10万程度で、支出もほとんど出されていない。この頃が、築理会活動が最も停滞していた時期である。

3. 新生「築理会」

しかし、停滞している築理会を何とかしようとの声が学内の若い人から出てきた。小泉隆氏(第一部22期)の努力により「活性検討委員会」幹事会を立ち上げた。そして平成7年は建築学科卒業30周年であり記念総会・懇親会を計画する。その前に何か起爆剤となるイベントを開催しようとの話がでた。幸いにも当時は久我先生のご寄付の100万円もそのまま残っていた。この時開かれたのが、今までの築理会の中で最大の行事となった「建築学科OB作品展」である。理科大1号館17階大会議室で10月12日～15日(平成6年)開催。この作品展の特徴は工学部建築学科(築理会)だけでなく、理工学部建築学科同窓会にも



臨時築理会報 (OB 作品展) 1994.12 刊

声をかけたことである。出展者は両学科卒の建築家20名。オープニングパーティーには、理窓企業人会からの来賓、本学教員など約80名が集まる和やかな懇親パーティーであった。「活性検討委員会」では会則の改定、名簿の毎年発行、会報年4回発行、幹事会の下に委員会の設置(企画総務・名簿・会報・事業)などを決める。この時から、築理会活動が学内主体の有志から学外の会員も含めた本格的な活動へと広げられたと言える。

平成7年(1995)1月、第7回(30周年記念)総会・懇親会が飯田橋会館で開かれた。会長も福島氏から八木嘉也氏(第一部3期)にバトンタッチされ、“新生築理会”として新しいあゆみが始まった。“新生築理会”では、先ほど述べた、会報年4回発行の他、セミナーの開催、見学会、又、会則の改定では会費を5,000円に値上げしている。第1回のセミナーは松崎育弘先生にお願いして「緊急報告・阪神大震災を振り返って」であった。タイムリーな企画であったので60名もの参加者があった。この年は5回のセミナーを開催した。そして、第1回の見学会はお台場の「フジサンケイビル」の工事現場であった。又、会報の編集作業は、これまでは学内で主に行っていたが、'95年夏号(H.7)から平賀一浩氏(第二部16期)にお願いするようになった。名簿も今までは全て業者に出していたが、この年から、データ入力したものを業者に渡すようにした。平成7年は“新生築理会”、さすがにこの年の決算報告をみると築理会会費として約294万の入金になっている。5千円の会費であるから単純に計算すると587名、この年までの卒業生は約3,700名(2割は不明者とすると実質約2,950名)なので約20%弱の会員が会費を支払った計算となる。ただ、この年の総会・懇親会は30周年記念にもかかわらず参加人数が39名であったのは、一般会員の関心を引き付ける難しさを物語っている。

ところで、“新生築理会”も4年目になると、組織もすこしマンネリ化してくる。この年(平成10年)の会報新年号の1ページには“築理会活動に参加を”“会費納入のお願いと…”であり、秋号には“築理会はどこへゆく”が特集であった。見学会もこの年の「集合住宅」見学会が最後となった。平成11年(1999)、会長も交代の年であり、野々村俊夫氏(第一部1期)を新しい会長に迎えて総会・懇親会が3月理窓会館で開催した。この時、会則も改定、会費を3,500円に値下げし、広く会費を集める、それに卒業30年以降の会員に終身



築理会懇親会 (2008.5.24)

会員制度を導入した。終身会員は会費3万円納入でその資格を得ることができるようになった。又、経費節減の意味もあってこの年から会報は年2回の発行になる。セミナーもこの年2回開催。平成12年、セミナーもこの年の21回目が最後となる。この年は築理会名簿の信頼性を高めるために全会員に対する名簿データの調査を行っている。なお名簿のデータは普段から常に訂正する必要もあり、又、新会員(新卒生)の入力も必要である。これらは全て学内で処理し田中治氏(1部11期)をお願いして現在に続いている。会報はこの年よりA4版となり「a.b.c.」(architectural bulletin of chikurikai)とタイトル名変更。



築理会報 abc 2001.2発行

4. 「築理会」と「野田建築会(理工学部建築学科同窓会)」

かねてから話題になっていたが、世間では工学部建築学科卒業生も理工学部建築学科卒業生も同じ東京理科大学建築学科卒として受け入れられている。そして平成14年版名簿からは東京理科大学建築学科名簿(築理会・野田建築会)として発行されるようになった。以降隔年で名簿発行する事が両会で了承された。これは築理会の歴史にとっても大きなエポックであった。

平成15年(2003)、理窓会館2階会議室で行われた築理会総会・懇親会で会長は新しく森本仁氏(第一部1期)に引き継がれた。総会では会則の一部を改定し、会長経験者を“顧問”として残っていただき、必要な時に会の運営に対して助言を得られる制度を導入した。

(大岩昭之記・第一部3期)

5. 会運営への努力と新たな試み

森本会長就任の翌年、会報2004春号のトップページに掲載された「築理会経営破たんか?」と題する記事に多くの会員は驚かされたことと思う。約1割の会員の納める会費で会の運営がなされている実情(多くのOB会でも抱える永遠・共通の課題である会費納入率の低さ)を訴えたものであった。これまで年2回全員に配布していた会報のうち秋号の



築理会総会・懇親会 (2010.5.22)

配布を会費納入者に限定配布し支出削減策を示し、会員に理解と協力を求めたものである。その一方で、終身会員制度の導入など会費の確保に努めるとともに支出削減に伴い影響が懸念される会員への情報提供については、会報の内容充実とホームページの活用により情報の確保につとめている。

会費を集める工夫だけではなく会費の更なる有効活用にも配慮した活動にも取り組んでいる。予てからの懸案であった築理会賞の実現について建築学科と調整を進め、平成17年3月19日学位記授与式当日、第一部、第二部建築学科の学業優秀者及び卒業制作優秀者各2名に初の築理会賞が授与された。築理会賞の授与を始めて早や9年、第一部建築学科の卒業制作優秀者の選定は工学部建築学科OB(設計製図担当非常勤講師・他)が審査委員を務め熱気溢れる審査会となっており、いまや建築学科の名物行事の感がある。



「りぼん」第1号 (2006.9.14発行)

6. 後輩学生との絆(「りぼん」発刊支援と学生との交流会開催)

第一部建築学科卒業生の中から卒業制作を記録に留めようとする動きが現れてきた。具体的な計画を質したところ、建築学科において保存されている作品集とは別に、卒業制作を本として出版しようというもので、卒業生(修士1年)自ら印刷以外の編集作業を行うなど、まさに手作りの作品集製作であり名前は「りぼん(理本)」とのこと。築理会として趣旨に賛同し、「りぼん」の支援を行うこととした。「りぼん」初刊を、平成18年の築理会総会の出席会員に配布し「りぼん」出版に対する理解と協力を求めた。「りぼん」も刊を重ねること平成24年11月発行で7回、第一部の卒業設計集に留まらず、設計製図の作品、課外活動の成果を加えるなどコンテンツの充実に加え、モノクロからカラーページへ変化するなど弛まぬ工夫がなされている。「継続は力なり」、後輩諸君の「りぼん」出版に対する努力が続く限り今後も応援を続けたい。

すでに触れたとおり、何処の同窓会でも共通の悩みと云えば先ず会費収入の安定化、続



最近年の築理会忘年会 (2012.12.19)

いて会の活動への参加者の確保、特に若い会員とのコミュニケーション不足が挙げられる。築理会も例外ではなく、歴代役員が大いに頭を痛めるところ。そのような折、一つの出来事がOBOG(築理会)と学生を近づける機会を与えてくれた。2008(平成20)年9月に発生したリーマンショックは周知のとおり、経済界全般に多大の影響を与え、築理会会員の多くが関係する建設業界も例外ではなかった。築理会員となる後輩、新たに社会に飛び立とうとしている後輩学生も将来の活躍の場の減少という形で余波を被っていた。後輩との交流を模索していた矢先の出来事、所謂バブル崩壊の余韻に加え更なる厳しい環境下において将来の人生設計に何がしかのアドバイスが出来ればとの思いを形に表す機会の到来とも言えた。建築学科の絶大な理解と協力を得て、平成21年秋、第1回目の「OBOGと学生の交流会」を開催、OBOGの経験談に始まり、建設需要の展望、建設業界の現状と将来、キャリア教育など内容の濃い意見交換が行われた。以降、毎年の開催が恒例となりつつあり、OBOGとの交流会が、就活情報の提供だけではなく築理会本来の目的である会員相互のコミュニケーションの醸成に機能するとともに、後輩学生のキャリア教育の一環としても役立つことを願っている。

7. 理窓会等との交流

野田建築会との交流を除いて「理窓会」を始めとする母校東京理科大学の他の同窓会との間に目立った交流はなかったが、平成19年野田キャンパスにおいて開催された東京理科大学ホームカミングデーへの参加及び東京理科大学発祥の地記念碑の建立事業への協力をきっかけに理窓会活動に参加するようになり、平成22年理窓会関連団体となった。特に、理科大発祥の地記念碑建立においては、工期が短期間であったにもかかわらず、デザイン案の作成に始まり詳細設計・積算、施工にいたる一連の業務を築理会会員の手によって無事完成し理窓会関係者から感謝と賛辞を得ている。

今後は理科大卒業生の同窓会の中において単独学科卒業生で運営する数少ない組織として独自の同窓会活動を続ける一方で理窓会、野田建築会との交流に努めることが肝要と史料される。なお、野田建築会との名簿の共同発行は2回で終わっている。これは個人情報等に関して野田建築会が配慮したためである。

(林 孝夫 記・第一部4期)